



# 小橋敏弘の ニッポン大好き! Hello Japan ヨーロッパ在住40余年、外から見ていた日本!

Vol.14 - 方言 - スイスではディアレクト (ドイツ語でDialektと書きます)

先日YouTube動画で、日本の青森県の津軽地方の方言を取り扱っていた番組を観ました。凄かったです。番組の構成も大変面白かったです。岡山県出身の筆者の耳には、まるで日本語とは到底思えない津軽弁に、ただただ感動しました。アジアのちっぽけな国、日本の本州の最北端ですが、その青森県の津軽地方の方言、第一印象はなんとなく韓国語の響きに近い感覚に驚きました。その津軽弁の難しさ、独特な文法、そしてその言語の由来など、色々と興味深い解説に、大変感慨深いと言っています。か、なるほどなあと驚いたと思います。



筆者の住んでいる、日本で言うと九州より小さい国、スイスでは、驚くかな4か国語が公用語となっています。ドイツ語、フランス語、イタリア語、そしてロマニッシュ語の4か国語です。国会答弁もドイツ語、フランス語、イタリア語と、国会議員が答弁の際は、ほぼ同時通訳されます。基本、議員のすべての人たちは少なくともドイツ語、フランス語は普通に会話が出来、理解できます。加え、対外的には英語も話せるのも当たり前の感じですが、その4か国語を話すスイス人の大半はドイツ語が公用語ですが、実はその4か国語以外にスイス語と言う第4の公用語があります。一般的にはスイスの方言と理解されています。ドイツ語に大変似ておりますが、不思議なことに一般的なドイツ人には理解できないスイスドイツ語と言われているスイス語です。



(写真左) スイスは首都ベルンにある国会議事堂  
そのスイス語を話す、俗に言われる Swiss German を話す人たちの間にも、数多くの方言が、日々、スイスの多くの地方で話されている事が意外と知られていないので、今日はそのお話を少しさせていただきます。

ドイツ、フランス、イタリアそしてオーストリアと言う大国に囲まれているスイスでは、ドイツ語圏、フランス語圏、イタリア語圏と大きく3地方に分けられて語られる事が一般的です。何故に語圏と記させていたかと言いますと、その地域に住んでいる人は、たとえドイツ語が公式言語とは言え、自分たちはドイツ語文化ではなくスイス語文化であることに、日本人では到底理解不可能な愛国心を強く持っている事です。たとえ小国、小地域とは言え、自分たちはドイツ語を話すスイス人、フランス語を話すスイス人そしてイタリア語を話すスイス人であって、決してフランス人でもなく、ドイツ人、イタリア人ではないときっぱりと言いつける国民であると言えるからです。



(Made in Switzerland) に誇りを持つスイス国民の象徴。画像上  
今回たまたま目に入ったYouTube動画で、津軽の人たちが自分たちの言葉、方言を

大切に、誇りに思っているように、スイス人のスイス人である事への誇りの強さを感じざるを得ませんでした。スイス在住41年の間、かず多くのスイス人と関わってきましたが、どんな職業であれ、どんな社会的な地位の人であれ、年齢を問わず、ほぼすべてのスイス人が自分がスイス人であることに、われわれ日本人ではとうてい理解できないほどの気持ち、感情があることに愕かされます。つまりそこには、方言の強さ、人間そのものが凝縮されているような気がしました。



(画像上。今もなお20歳になると男子には国民徴兵制が義務化されています。)  
筆者の岡山弁、決して全国的に知られていないと言いつてもいいかもしれませんが、あらためて自分の郷土弁を考えさせられました。今回も読んでいただきありがとうございます。

おまけ二エース  
スイス最後の将軍は、アンリ・ギザン将軍(写真右下)です。彼は、第二次世界大戦中にスイスの「武装中立」路線を貫き、ナチス・ドイツ側にも連合国軍側にも肩入れしない方針をとり、戦時中のスイスを守った国民的英雄として知られています。彼は、1960年8月30日にスイス連邦議会によって将軍に任命され、1945年8月31日に退任しました。



profile 小橋敏弘

年齢、もうすぐ70歳。  
1975年からヨーロッパ在住。その大半はスイスの企業にてサラリーマン生活を、64歳からリタイア生活をエンジョイしています。  
学生時代をイギリスで過ごし、大学卒業後はスイスに移住。孫6人に囲まれている爺さんです。  
趣味は何にでも興味を持ち、最近ではChat GTPを駆使して、幅広い分野を勉強中。母国語日本語を再勉強しながら、ドイツ語、英語も同時に駆使し、ヨーロッパ各国に住んでいる友達とコミュニケーションを取っています。  
唯一、趣味の運動は、ここ10年ほど毎週一回ぐらいのペースでやっておりますCountry Line Danceです。



写真/筆者(右)と妻